ベルグソンと西田幾多郎

片柳　榮一

西田のベルグソンへの思想的関わりは以下の二つのテーゼに纏められると思われる。（西田の引用は旧岩波版による）

I. 西田がベルグソン思想より深く学んだのは、連続としての運動の生き生きとした理解であった。

II. 西田によれば、ノエマ的に連続的運動として理解されるものは、ノエシス的には非連続の連続として理解されねばならないが（VI, 281）、ベルグソンにはこの理解が欠けている。

I.　西田がベルグソンから学んだもの

今回西田がベルグソンを読み始めて以降の『自覚における直観と反省』（1917 年）及び『意識の問題』（1920 年）、『芸術と道徳』（1923 年）などを読み返してみて、改めて当時の西田の思想の中核をなしているものにベルグソンの影響の濃さを思わされた。そしてベルグソンの引用も『働くものから見るものへ』（1927 年）以降のものが、ほとんど純粋持続についてのみ語られているのに、いまあげた書々においてはベルグソンの多様な論点が様々に取り上げられている。その中で最も特徴的なものを幾つか挙げておこう。「直観といふのは、主客の未だ分かれない、知るものと知られるものと一つである、現実その儘な、不断進行の意識である。反省といふのは、この進行の外に立って、翻って之を見た意識である。ベルグソンの語をかりて云へば、純粋持続を同時存在の形に直して見ることである。時間を空間の形に直して見ることである」（II, 15）。この『自覚』書の冒頭の言葉はこの書の問題が如何にベルグソンの問題から発しているかを示している。

しかし他方、彼は反省がいわば空間の問題であり、自覚において時間と空間を総合しようと目指している点で、ベルグソンとは異なった形で思索を展開しようとしていることもここには示されている。後に述べる西田のベルグソン批判の要点が空間の問題であったことを考えるとこの一文に問題の核心が示されていると言える。「普通には不連続な有限な経験が具体的な直接の経験のように考へられて居るのであるが、ベルグソンなどの考への様に無限に連続的なものが却って直接の実在といふことができる」（II, 125）。『自覚』において追求されているのはまさに無限に連続的なものの把握であるが、これはまさにベルグソンの問題でもあった。「ベルグソンの云ふ如く我々が甲点より乙点に手を動かす時、之を内から見れば分かつべからざる単なる一つの作用である。併しこれを外からみれば、甲より乙に至る曲線である。我々はこれを無限の位置に分かち、線を此等の位置の相互の整列として定義することができるであらう。しかし手の運動其者は単に位置や順序ではない、それ以上の或物を有つ、即ち「動き」mobilité である」（III, 259）。

この単純で無限であるもの、それが生命であり、しかも意識として具体化される生命である。「ベルグソンは「創造的進化」に於て眼の生成について次の如き面白い解釈を試みて居る。眼について驚くべきことは、構造の複雑と作用の簡単との対照である。眼の構造の驚くべき複雑なるに拘らず、視覚作用は単なる一つの事実である。如何にして、視覚作用が眼を構成し来ったか。手の運動には無数なる位置と其順序との以上に或物がある如く、視覚には眼を構成する細胞と其相互関係以上の或物がある。自然が眼を構成す

るのは、我々が手を挙ぐる如く、単なる一つの働きである。・・・或一つの機械を作る場合に、制作者は先ず各部分を作り、之を集めて全体を作る。全体は仕事の全体に当たり、部分は仕事の部分に当たる。科学者は我々の眼も此の如くにして生成せるものと考へる。しかし有機的機関の全体は仮に有機的仕事の全体に当たるとするも、その各部分は仕事の途筋を示すものではない。何となれば、此機関の部分は用ひられた手段を示すものでなくして、取徐けられた障碍を示すものである、凸型ではなく凹型である。純なる視覚は無限を見透さんとする一つの力である。併し此の如き視覚は幻影に過ぎない。生物の現実的視覚は物によって限定せられて居る、即ち掘割の視覚 une vision canalisée である。而して我々の感官たる眼とは単にこの掘割を示すに過ぎない。前に云うた手を動かす例に於て、手を鉄粉の中に差入れたとすれば、我々の眼とはその跡形の如きものである。私はベルグソンの視覚作用の創造といふ如きものが芸術的創造作用の本質であると思ふ」（III,269-70）。我々が見る有機体としての身体は生命の跡でしかなく、積極的な形でなく、窪みとしての凹型であるという見方は、形なきものの形という無の思想の途上にあるものと言えよう。そして西田が純粋視覚、純粋作用へと事物を還元するときにも考えているのは、跡形、凹面から見えざる生命へと向かう方向をみているのであり、基体なき作用 substratlose Tätigkeit（IV, 120）、働くものなき働きと言うときも根本においてはこの生命の流動を考えているのであり、この見えざるものを見るところに無の思想は始まる。

II. 西田のベルグソン批判

ところで『自覚における直観と反省』の結論部においては、「ベルグソンの純粋持続の如きも、之を持続といふ時、既に相対の世界に堕して居る、繰り返すことができないといふのは既に繰り返し得る可能性を含んでいる。」（II, 278）とのベルグソン批判が見られるが、西田のベルグソン批判が決定的な明白さをもつのは、「永遠の今」という考えが前面に出てくる『無の自覚的限定』（1932 年）においてである。

そこでの批判は二つある。一つはベルグソンにおいて、時間の連続性が見られるのみで、その非連続性、そこに含まれる否定性が見られていない、換言すれば否定として現れる空間的限定の意義が真に洞察されていないということである。「真の生命といふべきものは、ベルグソンの創造的進化といふ如き単に連続的なる内的発展ではなくして、非連続の連続でなければならぬ。生命の飛躍は断続的でなければならぬ。ベルグソンの生命には真の死といふものはない。故に彼の哲学に於て空間的限定の根拠が明でない。真の生命といふのは、唯私の所謂死即生なる絶対面の自己限定としてのみ考へ得るものでなければならぬ」（VI, 356、強調片柳）。

もう一つはベルグソンの時が流れる時として「現在」を持たないという点である。最初の批判が否定がないということであったのに対し、ここでは流れるだけで真に留まる真の肯定がないということである。「ベルグソンの純粋持続といふのは単に流れる時であり、自己自身の中に自己を限定する現在を有たない時である。従ってその内容は芸術的イデヤの意義を脱することはできない。私の自己自身を限定する今といふのは純粋持続をも否定するものである、所謂時と共に無限に流れ去るものではなくして、所謂時を見るものである、それは永遠に新たにして「時」がそこから始まるものである」（VI, 169）。

この一見相反する批判はどのように統一されるのか。西田は、繰り返しえない絶えざる流動がそのようなものとして見える場を求める。「我々の真の生命と考えられるものが、死即生なる絶対面的限定として、以上述べた如きものとするならば、生命といふものが一つの大なる流れと見られる前に、その根底にすべてを包む空間的限定といふ如きものが考へられねばならぬ。周辺なくして到る所が中心となる円の自己限定として、永遠の今の限定といふ如きものが考へられねばならない。その到る所が中心として、之に於て

自己自身の限定面を有った無数の円が空間的に限定せられると考へられると共に、周辺なき円の限定として、即ち一般者の一般者の限定として、之に於てあるものが無限の流によって限定せられると考へられるのである。大なる生命の流は死即生の絶対面の中に廻転しつゝあるのである。」（VI, 360-61、強調片柳）。繰り返しえない生命の流れがそのうちで廻転しているような絶対面、それが西田の考える究極の、時間の空間性である。ところで此処で述べられた周辺なくして到るところに中心をもった円という比喩は彼の「永遠の今」の思想を良く図解してくれるものであるが、これは、一つの中心としての個と、それを否定する非中心性と、否定即肯定としての絶対面という三重の構造をもつものである。「周辺なくして到るところが中心となる円の自己限定として之に於いてあると考へられるものは、或一つの中心を有った無限大に拡がる円と考へることができるであらう。かゝる中心が我々の個人的自己と考へられるものであり、そこに瞬間が瞬間を限定すると考へることができる、そこに自己自身を限定する時が成立すると考へることができる。かゝる自己と考へられるものは中心否定の円即ち絶対無のノエマ面からは何処までも否定せられる・・・。非中心的限定の立場からは自己自身を限定する現在といふ如きものは何処までも否定せられて行く、我々の自己は何処までも否定せられて行かねばならない。時は老い行くのである、我々は死に行くのである、一瞬の過去にも返ることのできない永遠なる時の流れといふものは斯くして考へられるのである。併し非中心的限定と考へられるものは固到るところが中心である周辺なき円のノエマ的限定に過ぎない。中心的限定は何処までも非中心的限定によって消されるのではない。時は何処までも蘇るのである、我々の一瞬一瞬が死であると共に生である」（VI, 203-4、強調片柳）。そして西田がベルグソンの連続を否定がなく、且つ留まる真の肯定もないと、一見相反する批判をなす時立っているのは、一瞬の過去にも返ることのない永遠なる時の流れにもかかわらず、時が甦るという逆説の生じる絶対面である。

西田は人格の問題を根本的に再考しようとして記した「形而上学序論」（1933 年、旧版第七巻収録）の最後のところで突然、ベルグソンの『創造的進化』から直観について述べた所をフランス語の原文で訳文なしで載せている（VII, 81-82. ベルグソンからの引用は、ここでは松浪氏の訳をかりる）。「そこで我々のもっているもののうち、外的なものから最も離れているとともに知性的なものによって浸透されること最も少ないものに自己を集中してみよう。我々自身の内奥において我々が我々自身の生命に対して最も内的であると感じる点をさぐろう。その時我々が没入するのは純粋持続の中である。この持続においては過去がつねに前進しながら、絶対的に新たな現在によってたえず増大していく。けれどもそれと同時に我々は、自己の意志のバネがその極限まで緊張するのを感じる。我々は、自己の人格の激しい自己収縮（contraction 西田は緊張と訳す）によって、去りゆく過去を取り集め、これを緻密で不可分のまま現在に押し入れなければならない。斯くして過去は、現在に忍び込むことによって、現在を創造するであろう。我々がこの点において、自己自身を捉える瞬間は極めて稀である。かかる瞬間は、我々の真に自由な行動と一つでしかない」（Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, p. 201、『創造的進化』（ベルグソン全集４　松浪信三郎・高橋允昭 訳）、白水社、1966、229 頁。この箇所はベルグソンの『創造的進化』の第三章にあり、この章はベルグソンの認識論の集大成をなすものであり、その彼の中心思想を語り出すところである。それゆえ西田はベルグソンの思想のまさに核心を問題にしているのである）。そして次のような解説をしている。「真の直観は斯く我々の自己がこの空間的なる現在を突破するところになければならない。そこに我々の人格の死することによって生きるといふ意味があるのである。それは瞬間が瞬間自身を限定するとも考へることができる。ベルグソンでは空間性といふものは、どこまでも唯、純粋持続の弛緩として考へられるのであるが、・・・時間が真の時間であるためには、空間といふものは何処までも単なる時間の弛緩であってはならぬ。それは絶対否定の意味を有っていなければならない」（VII, 82）。

ベルグソンは自らの純粋持続が単なる自動的流れではなく、過去から現在への移行が、人格的意志の極

度の緊張を伴うものであり、それによって現在を新たに創造するものであることを語り、西田も注意深くこれに眼をとめている。そして西田は単なる移行でなく、「我々の人格の死することによって生きる」ことによる「現在の突破」とさえいう。西田は瞬間としての個的人格の意味を、一層深く見つめている。突破に籠められた否定が人格の意味を創りだしていることを見ている。この点は見過ごされやすいので特に強調しておきたい。そしてベルグソンがこの集中を、弛緩としての空間とは反対のものと考えているだけなのに対し（しかし稿をあらためて取り上げねばならないが、ベルグソンが、精神の形づくる純粋空間という図式と、物質そのものの広がりとを注意深く区別していることは注意されるべきであろう cf. ibid., p.204）、空間の否定性を弛緩とするのではなく、弛緩と見える空間の非集中性という否定が逆説的に肯定に転ずる理を見詰めている。西田が空間に絶対否定の意味があるという時、この絶対否定は単に、全てが老い行き死に行くという非中心的限定の意味ではない。そうではなく西田は、この絶対否定ということのうちに、一瞬一瞬が死であると共に生であるという根本的な逆説を生じさせ、そのようにして自由なる個的人格を創りだして行くものを見ているのである。